

おぼけの季節【〇〇人間篇】

陽羅 義光

これだけおぼけを書いてきたが、どうにもわからないことがあって、それはおぼけと人間の境目です。

これは人間っぽいがおぼけなのか、これはおぼけっぽいがおぼけなのか。

物語や映画にも、この境目のキャラクターが登場して、「はっきりしてくれ」といいたいことがあります。

たとえば「鮪人間」とか「蜘蛛人間」とか。

名前だけでは、鮪のような人間なのか、人間のような鮪なのかだれにもわかりません。

いずれにしてもこれらは、その姿からしておぼけだが、「人間」と付いているから人間なのか。

あるいはもともと人間だったのだが、おぼけに変化したので、いちおう前の名残りで「人間」と付いているのか。

となると、「〇〇人間」はやっぱりおぼけということになり、最近登場した「コンビニ人間」なんてキャラクターも、あんがいおぼけの一種なのかもしれません。

それでももともと人間だったおぼけはとて多いため、これにみんな「人間」なんて付けたら、「〇〇人間」ばかりになってしまいます。

「ネズミ男」とか「カマキリ女」などもおぼけなんだろうが、「男」とか「女」とか付いているから人間なのか。

もしかするとおぼけの世界でも、「人間」とか「男女」とかの言葉が存在するのかもしれないし、もしかすると人間のほうが勝手にそう呼んで、これは仲間なのだから怖がる必要がないと思いついてしまっているのか。

そこらあたりをすこしでも究明したいので、今回は【〇〇人間】を登場させることにしました。

はたして究明できるかどうか、逆によけいにこんがらかる可能性もあるけれども、さてどうでしょうか。

禿光山人 拝

* * *

「かいじいよ、まるまるにんげんたあ、おぼけかにんげんか」

「まるまるにんげんですか、丸々人間なら、それは、丸々人間でしょうね」

「かいじいよ。いよいよおぼけたか。それとも、とぼけとるんか。わしは【たこにん

げん】とか【くもにんげん】のことを、いっとるのじゃ」

「すみません、そういうことですか。それは程度によりますね。どの部分が鮎や蜘蛛で、どの部分が人間なのか」

「あんがいややこしいんじゃない。かいじいはかいじいなんだから、きっぱりせいや」

「そういわれても。ならば半人半獣とか半人半魚とか半人半鳥とか、この場合半人半鮎、半人半蜘蛛の、半分半分ということでお話しましょうか」

「それでええ」

「それならば、やっぱりおぼけですね。半分人間という人間はいませんから」

「そうかのう。たとえばじゃ。じこで、かはんしんをなくして、かはんしんがきかいじゃったら、やっぱしはんぶんになんげん、きかいになんげんじゃろ。それもおぼけなのかいな」

「ううむ、難題ですね。それは機械の種類にもよるでしょう。人間の部位に近い作り方をされていれば、それは人間で、奇怪な機械であったなら、おぼけでしょうね。実はわたしは、左手が義肢で右足が義足です。ついでにいうなら右目が義眼、奥歯が義歯です」

「そらあ、はつみみじゃのう。たんげさぜんより、かっこいいのう」

「わたしが自分で作ったもので、生身にかなり近いものですから、いわなければだれも気づきません」

「かいじいが、おぼけっぽいのは、そのせいもあったのかのう」

「了解はしにくいですが、多分」

「だいたい、おぼけとになんげんのくべつは、どこでするんかいな」

「それが区別つきません。善悪一如といいますが、人化一如ですから、基本的には人間とおぼけはいっしょです。ただ多くの人間から見て、あいつはおぼけだとなれば、それがおぼけなのでしょうね」

「なっとくせんかのう。たとえばじゃ、わしのなかまがみんな、わしをよくおぼけじゃいうとるが、ならばわしはおぼけなのかのう」

「いえいえ、それは口だけで、勉強も運動も極めて優秀な人間や、人間には普通できそうにないことを楽々とする人間を、人間ばなれているという意味で、おぼけと呼ぶんで、それは単純な形容であって、本質的な実体ではありません」

「なるほどのう。すこしわかりかけてきたわいな。それでもわしは、わしをおぼけかもしれんと、かんがえることがあるぞい。わしは、べんきょうもうんどうも、ゆうしゅうだが、きわめて、というわけではないからのう。になんげんにはふつう、できそうにないことを、たまにするけんど、らくらくと、なんてことはないしのう」

「それではまるまるになんげんの例を出しましょうね。もちろんおぼけということでおぼけ認知されているものばかりを」

「だれが、にんちしたんじゃ」

「それは、つまりその、わたしが。お恥ずかしい」

「じょうだんじゃないぞい」

* * *

「かなり人間に近いおぼけは、【しごとしにんげん】【げいじゅつにんげん】【えろにんげん】あたりでしょうか」

「【えろにんげん】たあ、おもしろそうじゃのう」

「人生えろえろ、といますからね。でもここでは喋りませんよ」

「なぜじゃ」

「発売禁止になってしまいます」

「はつばいするんか」

「冗談ですよ」

「じょうだんは、きらいじゃ。とにかく、しゃべれるやつだけ、しゃべれ」

「【みみずにんげん】【まんがにんげん】【だいぶつにんげん】【へそにんげん】

【なすにんげん】【かせいにんげん】【たきつぼにんげん】【はなぞのにんげん】

【ごきぶりにんげん】【くそにんげん】【いやいやにんげん】【にんげんにんげん】」

「【かせいにんげん】たあ、かせいじんのことか」

「火星人とはちがいます。火星人は火星にいる人間のことですが、【かせいにんげん】は火星にいるおぼけなのです」

「かせいにも、おぼけがいるのか」

「宇宙のあちこちにおぼけはいます。しかし人間がいるのは地球だけです。火星にも火星人などいません。いるのは【かせいにんげん】というおぼけだけです」

「だれがなづけたんじゃ」

「わたしです」

「ならばええ。かいじいは、その【かせいにんげん】を、じっさいみたんじゃな」

「見たどころか、食われそうになりました」

「それは、ざんねんじゃったのう」

「そうですね、折角（せっかく）の体験なのに」

「【かせいにんげん】は、まんがでみるように、やっぱし【たこにんげん】に、にとるのかのう」

「それは人間の想像と創造です。【かせいにんげん】は、鮫よりも烏賊（いか）に似ていますね。尤も、おぼけはおおよそ夕暮れ時にでますから、鮮明に見たわけではありません。食われなかったけれども、墨をかけられました。それで烏賊に似ていると、おもいこんだのかもしれない」

「ならば、【いかにんげん】でよかろう」

「【いかにんげん】は、地球にあります。【かせいにんげん】は、いくら烏賊に似てはいても、火星のおぼけです。【いかにんげん】は、巨大な人間の頭が烏賊の頭なんです。【かせいにんげん】は、巨大な烏賊の足が人間の足なんです」

「おんなじじゃねえのか」

「わたしはあの三角の部分を、頭といたんです」
「おんなじじゃねえか」
「絵を描いてみましょうか」
「かいてみい」
「はい、描きました」
「なんじゃこれ」
「【かせいにんげん】です」
「いかに、にんげんのあしを、つけただけじゃねえか」
「それが【かせいにんげん】です。尤もこの絵の千倍は巨大ですがね」
「このえは、へいめんじゃからわからん。りったいでかけや」
「そんな無茶な」
「かいじいに、ふかのうはあるめえ」
「不可能だらけです」
「まあええ。【かせいにんげん】は、そらとぶえんぼんで、ちきゅうにきたんか」
「火星には空飛ぶ円盤なんてありません。火星には人間がいないのですから、空飛ぶ円盤は作れません。空飛ぶ円盤を作るのは、地球の人間です」
「そうだったのかい。わしはいままで、だまされてきたんかのう」
「小説とか漫画とかは、嘘を書くものですから、別段（べつだん）騙してなんかいませんよ。そういうつもりで読まないといけないのです」
「だまされたわしが、あほやったのかい」
「いえいえ、良い読者というわけです」
「よくわからんが、まあええわい。そんなら【かせいにんげん】は、どうやって、ちきゅうにきたんか」
「【かせいにんげん】が地球に来たなんて、誰もいってはいませんよ」
「だば、だば、だば」
「はい、そういうことです」
「そそそ、その」
「証拠ですか。わたしの色が黒いのは、【かせいにんげん】に墨をかけられて、それがなかなか落ちないせいです」
「みごとな、じょうだんじゃのう」

* * *

「【みみずにんげん】とか、【くそにんげん】とか、【へそにんげん】とかも、おもしろそうじゃのう」
「それはそうですが」
「また、はつばいきんしか」

「まあ、なんとか、誤魔化（ごまか）せるでしょう。ちなみに誤魔化すという言葉は、もともとおぼけの世界の言葉なんですよね」

「それは、かいじいの、ごまかしじゃろう」

「最近信用ないですね」

「しんようしとるから、きつくいえるんじゃ」

「【みみずにんげん】を見たら、おしっこをひっかければ、退治できます」

「だども、ちんちんが、はれるんじゃろ」

「よく知っていますね。腫れても、きれいな水で洗えば治ります」

「そんなことは、わしでもしっとるわい。そいつは【みみずにんげん】でのうて、ただのみみずじゃろう」

「ただの蚯蚓でないのは、その後です」

「かいじいよ、そんなにこわいかお、せんでくれ」

「怖い顔は生まれつきです。【みみずにんげん】は、たたるんです」 「たたりじや」

「そう、祟りです。ちんちんの腫れはひいても、ちんちんが蚯蚓になります」

「それはたいへんじゃのう」

「ですから、おしっこは道端なんかでやらないで、ちゃんと便所でやってください」

「わしがみちばたでやるとるの、どうしてしっとるんじゃ」

「千里眼（せんりがん）というものです」

「このほこらの、ちかくでやるんじゃ。せんりもいらん」

「では訂正。一里眼」

「あいかわらず、いいかげんじゃのう。して、みみずになったちんちんは、どうやってなおすんじゃ」

「そこで【くそにんげん】の登場です。【くそにんげん】は要するに糞の山です。まあ、砂場で作る砂山くらいの大きさです。そこに蚯蚓ちんちんを押し込むと、なおりますよ」

「くさいちりょう、じゃのう」

「【くそにんげん】は蚯蚓ちんちんを押し込まれると、くそっ、と叫んで雲散霧消（うんさんむしょう）します」

「うんこさんむしょう、じゃろ」

「そうともいいます。【くそにんげん】が消えると、どこかで【へそにんげん】が臍で笑います」

「ばかばかしい、はなしじゃのう」

* * *

「とっておき、というか、きわめつけは、ないんかのう」

「それはどの世界にもあるんです」
「ならば、それを、さっさとしょうかいせんか」
「ものには順序というものがありまして」
「べんかいは、しんでからにせい」
「はいっ、それでは最後に【さけにんげん】の話です」
「さいごにしては、つまらなそうな、はなしじゃのう」
「それは話を聞いてからいってください」
「きいてからじゃ、つまらなそうとは、いえん。つまらん、というばかりじゃ」
「はいっ、それではお待たせしました。【さけにんげん】です」
「【さけにんげん】ならば、このむらにも、いっぱいいいそうじゃのう」
「いえ、ひとり、というか、ひとばけ、のみ。村では拓さんと呼ばれていたおじさんです」
「たくさんなら、しとったのう。でっかいからだして、あかいかおして、いつもふらふらして。さいきん、みかけんのう」
「その拓さんが、酒毒（しゅどく）にやられて」
「おおざけのみ、じゃったからのう」
「周りの者は、酒をひかえろ、酒をやめろと、さかんに忠告したんですが、聞く耳をもたない。頑固で意地っ張りで我が儘で自己中心。からだかふるえるのは酒のせいではない、と言いつけて、益々飲むわ飲むわの始末です」
「それで、【さけにんげん】に、なっちまったのかい」
「おばけになってしまった以上は、周りもとやかくいえませんし、黙っていると、困ったことに仲間を増やしたがるんです。呂律（ろれつ）がまわらないのに、口がうまいですから」
「それが【さけにんげん】の、しゅうせいかい」
「習性というか、おばけとしての仕事になってきたんですね。いずれ酒毒が蔓延（まんえん）します」
「そらあ、たいじせんと、いかんぞい」
「はいっ、けれども拓さんは、おばさまがたに絶大な人気がありましたからねえ。【さけにんげん】をたいじしようとする、その勇者は、おばさまがたの鬻（ひん）（ひんしゅく）にあい、もう村にはいられなくなるくらいの状況になるのです」
「そらあ、たくさんもたくさんじゃが、おばさまがたも、おばさまがたじゃのう。たしかにきわめつけじゃ」
「どうすればいいでしょう、金ちゃん」
「かいじいの、てにおえんものは、わしにはどうにもならん」
「村の連中もばかではないから、そのうち【さけにんげん】のおそろしさに気づくでしょう」
「そうじゃのう。ほっとけほっとけじゃ」
「では、仏さんになるまで、ほっときましょう」

* *

「【さけにんげん】はたしかにきわめつけじゃが、とっておきじゃあるめえ」

「ばれましたか。それではいよいよ、とっておきをだしましょうか」

「まってました、かいじいよ」

「【すいとりにんげん】とか、【くみとりにんげん】とか、【ひるにんげん】とか、【きすにんげん】とか、他にもあれこれ呼ばれているおばけで、たつのおとしごのばけもの、といったかんじのものです。ばけものといっても、大きさは喇叭（らっぱ）くらいのもんです」

「だば、うみのなかにいるんか」

「海にも陸にも出沒します」

「ようするに、すいとるんじゃな」

「その通りです。吸い取る力は、蛭（ひる）もかないません」

「ならば、【すいとりにんげん】でええ」

「ではお言葉に甘えまして、【すいとりにんげん】でいきましょう」

「なにを、すいとるんじゃ」

「人間の生き血をすいとるんです」

「だば、【きゅうけつき】かい」

「【きゅうけつき】よりたちがわるいのは、生き血のみならず、人間の水分もみんなすいとりますから、やられた人間は、枯れ木さながら、触るとぼきんと折れる始末です」

「それはとっておきじゃのう、それはおそろしいのう」

「わたしなんか前立腺（ぜんりつせん）がわるいから、おしっこがひどくでにくい。

【すいとりにんげん】がおしっこだけすいとってくれればいいんですが」

「かいじいがたのめば、やってくれるかもしれんぞい」

「じつは以前やってもらったことがあるんです。でもなんか、気持よくなってしまって、もっともっと、なんてあえいでましたら、ついでに生き血もだいぶすいとられました」

「それでかいじいは、かおいろがわるいんじゃな」

「いえ、それはだいぶ前のことですから。わたしの顔色がわるいのは、このごろ雨続きで祠をでていません。なにも食べてもいませんから、そのせいでしょう」

「そらあいかんのう。わしがたべものをもってくるでな」

「どうやって食べ物を獲得するんですか」

「すいとるんじゃ」

「もしかして、金ちゃんは【すいとりにんげん】」

「あほか。たつのおとしごのばけものに、わしがみえるんか」

「すいません、目がかすんでしまって」

「あたまがかすんでいるんじゃ」

* * *

「もっと、おらんのかい」

「無茶をいわないでください。だいたい、男とか女とかなら許せても、まるまるにんげんなんて、名付け方がいけませんよね。たとえば【へびおとこ】とか【へびおんな】とかなら、おばけっぼいですが、【へびにんげん】はやっぱり、名前的には人間ですよ」

「そこじゃ、わしがきになるのは、そこなんじゃ。たとえばじゃ、おばけだとおもって、たいじしたら、にんげんだった、なんて、しゃれにならん」

「洒落にならないどころか、罪になります」

「ううむ、どうすりゃええかのう」

「その解答はひとつしかありません」

「なんじゃ」

「おばけを退治しないことです」

「なんじゃと」

「おばけと人間が、共存共栄できる世の中が、理想ではありませんか」

「そんなこと、できるんかのう」

「金ちゃんが大人になったときに、それを実現させてください」

「おそろしいよのなかに、なりゃせんか」

「人間だけだって、戦争ばかりの恐ろしい世の中なんです。おばけが、平和をもたらしてくれるかもしれませんよ」

「ほんまかのう。しんじられんのう」

「つまりこういうことです。恐ろしくて不気味で禍々しいおばけを、抱擁できるくらい、人間が優しくなれば、世界は平和になるということです」

「おばけとにんげんがなかよくしたら、かいじいはいらんようになるのう」

「わたしにとって、一番の願いは、わたしの存在が不要になることなのです」

「わたしには、ようわからん」